

閉館間際の静まり返った大学の第一図書館。新しい第二図書館ができ、第一図書館はほとんど使うことのないマイナーかつ古い書籍ばかりが所蔵されている。多くの生徒は第二図書館を利用する。もちろん私もそうだけれど、どうしてもここにしかない資料があって、こっちの第一図書館に来ていた。

「あ、あれ、そうかも……っ」

それらしい本のタイトルを見つけたけれど、本があるのは高い棚の上で、脚立を使わないと取れなさそうだった。

（仕方ない、脚立を使おう。……でもここにあるの、古いものばかりだからちょっと怖いなぁ……）

だからといって友人を呼ぼうにも、もう閉館五分前だ。仕方なく私は古い脚立を使うことにして、恐る恐る登った。

「もう、ちょっと……！」

指先が背表紙に触れた瞬間、古びた脚立がガタリと嫌な音を立てて揺れた。

「きゃっ……！？」

バランスを崩し、身体が宙に投げ出される。

（あ、嘘、落ちる……！）

そう覚悟して目を瞑った瞬間、ドサッ、という鈍い音。けれど痛みはない。代わりに伝わってきたのは、硬い胸板の感触と、鼻腔をくすぐる清潔な石鹸の匂い。背後から誰かが私の身体をしっかりと受け止めてくれていた。

「……………大丈夫ですか」

顔を上げると、司書のエプロンを身につけた男の

人が、驚くほど綺麗な顔立ちでこちらを見下ろしていた。無駄のない黒縁の眼鏡が、その端正さをいっそう際立たせていて、司書という職業が不思議なくらいよく似合っていた。

「……っ、あ、はい……。ありがとうございます…
…っ」

（助けて、くれたんだ……。でも……）

私は息を詰めた。私の背中を支えている手とは別に、もう片方の彼の大きな手が、私の左胸をブラウスの上からガッシリと、逃がさないように鷲掴みにしていたからだ。

（抱き止めようとして、だよね……？）

指先がブラウス越しに、柔らかい胸の膨らみに深く食い込んでいる。その感触があまりに生々しくて、心臓が耳元で鳴っているみたいにうるさい。

「……………気をつけてください。この脚立は古くなっていて危ないんです。事故があったら、どうするつもりですか。誰か一人が支える必要があるんですよ」

「っ、あ……ご、ごめんなさい……っ」

耳元に降ってくるのは、どこまでも低くて静かな、たしなめるような三上さんの声。それは司書としての正しい注意そのものなのに、私の左胸を鷲掴みにしている彼の手は、微塵も離れる気配がない。

（注意されてるのに……っ。すごく真面目な顔して怒ってるのに……どうして、胸を掴んだままなの……！？）

「今みたいにバランスが崩れて落ちてしまっは一大事です。次からは私に声がけをしてください」

「あ、は、いっ……」

「時間によっては休憩に入っているかもしれませんから。その際は他の職員に三上、と僕の名前を伝えてください」

「えっと、あのっ」

それより一度手を離して欲しい、と伝えようとする
と、彼は私の胸をさらに深く、むぎゅっ♡と力
強く握り込み、指の腹でゆっくりと円を描くように
捏ね始めた。

「んんうッ、あ、ああ、手が……っん、その、当た
って、ます……っ」

「私は支えているだけです？ あなたが倒れない
ように」

三上さんはそう言って口元だけで笑みを作ったが、
目はまったく笑っていなかった。

そして私の困惑を無視するように、掌全体で胸を
包み込み、ゆっくりと胸を揉み始めた。

ぐにゅり♡ ぐにゅり♡ ぐにゅり♡

「一人で古い脚立に乗ったこと、反省しているん
ですか？」

「っ、は、はう……っ、んん、……っはんせ、い、
してますうっっ」

（だめ……三上さんの手が、私の胸を、逃がさない
ように、むにゅうって……っ！）

三上さんは、空いている方の手で、私のブラウス
のボタンに長い指をかけた。事務的な手つきで、一
つ、また一つとボタンが外されていく。

「声が少し小さい気がしますね……」

「あ……っ、はう……っ、あ！三上さんっ、何を
……っ！？」

ブラウスのボタンがすべて外され、インナーごと
ブラを上にはずらされる。ぷるん♡とおっぱいが露
わになって、ひやりとした外の空気にさらされた。

「や、やだっ」

急いで手で服を下ろそうとするが、私の両手は三

上さんの大きな掌によってひょいと持ち上げられ、そのまま頭上へと誘導された。

「危ないですよ、本棚の近くでそんなに暴れては。やっぱり反省していなかったんですね？」

「あ……っ、あのっ……三上、さんっ……っ！」

私は彼に腕を固定され、無防備な胸元を三上さんの眼前に晒し続けることしかできなくなった。そしてその剥き出しになったおっぱいを、三上さんは今度は直接むぎゅう♡と、掌全体で揉んだ。

「っ、はあ……っ、はううっ、三上、さんっ、あうっ……」

三上さんの指が、私の柔らかな膨らみをむにゅう♡むにゅう♡と、形を壊すように、じっくり時間をかけて捏ね回していく。おっぱいに手のひらを通して熱が、染み込んでくる。